

## セカンドインパクト症候群

久しぶりの大雪だった。雪は少し融けたが、道路のあちこちがツルツルに凍っている。滑って転んで、頭を打つ。脳は大丈夫か？と不安になるひとは増える。

そんな患者さんのひとり、F子さん。50歳。あつという間だった。アブナイと思った途端、後ろ頭を道路に打ち付けた。大きな皮下血腫（たんこぶ）をつくっている。瞬間、意識はなくなったか。いや、あったような。その辺の記憶は定かではない。しばらく身動きできなかったらしい。

「コンピュータ断層撮影（CT）」の検査では、頭の中には出血はない。脳挫傷もない。軽い脳震盪（うごめ）を起したただだろう。さらに、もともとの脳の萎縮もないのだ。頭を打ったことを忘れてしまう頃に発症する慢性硬膜下血腫の危険性も低い。

でも、油断大敵。脳震盪は、脳が大きく揺さぶられて起きたものだ。検査で異常がなくても、後に、セカンドインパクト症候群（SSC）を引き起こすこともある。

SSCとは、脳震盪などを起こして数日から数週間後に、また同じように頭を打つ

た後に起きる。その時には、頭の中で急に血腫が大きくなる急性硬膜下血腫や、脳全体が腫れあがる脳腫脹などで死亡するケースもみられる。救命できても、深刻な後遺症を残す率が高い。

ところが、その発症メカニズムはよく分かっていない。しかも、やっかいなのは、1回目も2回目も大した外傷ではないのにSSCは起き得るということだ。というのは、F子さんにもその危険性があるということになる。

ワッシーは、「また転んで頭を打たないでね」と話しながら、医者「お気楽さ」に気付いて赤面した。通勤には、滑る道でも歩くしかないのだ。誰か転ぼうとして転ぶものか。頭を打とうとして打つものか。慌てて、「SSCなんて、滅多に起きないけど」と付け加えた。

（石黒修三「いしへろクリニック・脳神経外科専門医」1/25北國新聞掲載）